

漢字によつて語を表記する工夫の一例

——熱田本平家物語の「はたかる」の場合——

山田 俊雄

はじめに

「熱田本平家物語」は、平家物語といふ名を負ひ、またその実を具へてはゐるけれども、漢字を極めて多く用ゐ、かなを全く補助の位地に隷属させた、いはゆる真名本で、読み解きたいものである。ここで筆者がとりあげる「はたかる」といふ語の漢字表記の場合、この「熱田本平家物語」では、異様な文字が用ゐられてゐる。「酢」の字が、「はたかる」をあらはしてゐる。このやうな種類の文字が、全篇にわたつて用ゐられてゐるといへば、事実を曲げて、

誇張にすぎてしまふが、とにかく「熱田本平家物語」の用字は異様不可解なものを数多く含むものであつて、その故に特異なテキストとみられる。そのやうな異様不可解を、ときほぐしてみることは、学術的な研究といへるかどうか、甚だ怪しいけれども、筆者は謎解きを試みて、そこにあらはれた語表記の工夫の一つが意味するものを、ここに披露したいと考へる。

一

問題の字は、「熱田本平家物語」の巻第九の三十五丁表

の三行目にある。覚一別本系のテキストで、巻第九の「越中前司最期」（または「盛俊最後」）の段の半頃に相当し、熱田本のテキストも、ほど同一の系列をなすので、照合はたやすい。そして、次の如くである。

而レハ、取テ^ニ搦テ猪俣ヲ^ニ不レ働、猪俣臥ナカラレ下^ニ

欲スレトモレ抜トレ刀ヲ、指^ハ辭^ニ不スレ及^ニ三刀ノ櫛^ヲカヲ^ニ捕^ニ

この「指辭」の「辭」は、傍訓によつて解けば、「ハタカル」といふ動詞に必ず用ゐられ、その連用形が助詞「テ」に接して促音便の形をとつた「ハタカツテ」を示すものである。傍訓「ハタカテ」はこの種の表記形態のものに普通の、促音を頭はに示さないものと解せられる。

覚一本系また流布本の系列の他のテキストの活字翻刻を見ると、近代の人のこのあたりの文脈の解釈の基本になる語の認定のしかたがわかるが、二、三の例を示すと左のやうになる。

指はたかつて (富倉校注、朝日新聞『日本古典全書』)

米沢図書館蔵葉子十行本)

指の股はだかつて (高橋校注、講談社『新註國文叢書』)

元和九年刊本)

ゆびはだかつて (高木他校注、岩波書店『日本古典文

学大系』龍谷大学図書館蔵本)

これらの近代人の校注本を通覧して、一致を見てゐない点は、「ハタカル」「ハダカル」二つに分れるところである。富倉校注の本は、底本の姿を忠実に再現したものと評してよいかと思ふので、むしろ、「ハダカル」の方、つまり第二音節を濁点つきで、濁音とみとめて再現した方への信用度が疑はれるところである。

といふのは、高橋校注本が底本として採用した元和九年刊本に匹敵しつゝ、やゝ刊行の早い元和七年刊片仮名本整板本を底本にした野村宗朔校注の『昭和校訂平家物語流布本』（武蔵野書院刊）においては、

指の股はたかつて (同書四四九頁十一行、十二行)

とあり、さらに頭注に、

はたかつて(説)——広がり開いて

と明記して、その校注者の緒言(二三四行目)に

頭注のうち(説)としたのは、本書の特殊な、又は現代普通と異なつた等、其他特に読み方に注意すべきものである。

と述べてある項に該当することを積極的に述べてゐる。この点に限つて見ると、野村校注本の再現を無視してしまふ

のは公正を欠く取扱ひであるといはねばならない。この個所について、右にあげた校注本の一つ一つについてその底本の真相を再検する勞を煩はしいと思はずに調査すべきところであるが、たとへば、寛永七年刊片仮名整板本（架藏）によつてみても、

指ノ股。ハタカツテ

（卷九、三十五丁ウ十二行目）

とあつて、野村校注本の精確は疑ふ余地が少いばかりか、平家正節（京都大学本覆製による）にも

指のまたはたかつて

（第三冊、一八〇八頁二行目）

とあつて、「ハタカル」といふ第二音節清音が、平曲の語り方の伝統であつたものと推定せられるから、刊本の方の「ハタカツテ」が濁点を有しないのは、野村校注本の頭注の如くに、特に注意すべき事がらであると断じてよい。

そして、キリシタン語学資料のうち、ラポ日辞書、日ポ辞書などによつて、ローマ字表記において「ハタカル」が正しいと考へられてゐた事実があるのを、ここに想起するならば、平家物語の語りの際の伝統としての「ハタカル」は、実は日本語の歴史の上に「ハタカル」といふ語が実在したことが、またその時期は、室町時代末から近世初頭を起點として考へると、上限についても、下限についても改め

て研究すべきものであること、等が明らかであらう。

二

「ハタカル」といふ語は、平家物語の場合のみならず、他の場合にもすべて「ハダカル」でなく、したがつて、古典文学作品一般に「ハダカル」は「ハタカル」であつたと即決すべしといふことではないが、とにかく問題らしいことが見出されたのであつて、ここで従来の辞典の記述が不十分であることは、一々例証する迄もないであらう。一語一語の清濁の変遷を辞典の記事に精く示すことは、困難を伴ふといふ事情のある出版の現状でも清濁の沿革を簡明に述べる位のこととは望んで得られぬことではない。

したがつて、筆者をもふくめて、辞典編修家の見落してあつたことは明らかである。

しかし、「ハダカル」といふ形もまた、日本語の歴史の上で、さまざま新しい形であるとはいへまい。運歩色葉集（京都大学本、静嘉堂本いづれも）には、他動詞形の「ハダク」と思はれるもの

開ハダクルレロ

と、

ハダカル
跋 踏馬

とが、濁音表示を伴つて存在するのは、その一証である。したがつて、従来の辞典が、運歩色葉集の「ハダカル」の項目によつて、この語を説くのは理由があつたといへるのであつて、「ハタカル」と「ハダカル」、「ハタクル」と「ハダクル」との関連については、今後の課題として、保留する必要がある。「ハタクル」については森田武が仮名草子「伊曾保物語」中に見えるのに注意して、その「廿一鳥と狐の事」(岩波書店『日本古典文学大系』、「仮名草子集」四一二頁頭注三)の注において日ボ辞書を援用してその清音なるものを正しい伝承の一つとして確認してゐる。

平家物語の中には、この「ハタカル」は一例しか見えないが、「指ハタカツテ」の意味は、「指の股が、はり広がつて」の意であらうこと、ほど疑問の余地がない。ラボ日辞書には、高羽五郎の労作にかゝるその索引によつて検すると、「ハタカル」「フミハタクル」が見える。したがつて、「ハタカル」「ハタクル」両形併存が知られるが、日ボ辞書では、「ハタカル」「ハタクル」の両形、および「フムバタカル」の形が得られる。したがつて、「ハタカル」にせよ

「ハタクル」にせよ、第二音節「タ」の清音なることは同じで、動詞としてことなるところは、前者「ハタカル」がいゆる自動詞、後者「ハタクル」がいゆる他動詞といふ点にあるものと考へられる。

さて、「熱田本平家物語」の用字「辭」に関していへば、甚だしく不可解が遺るといはねばならない。漢字として「辭」の形は類を絶するものではないけれども、「ハタカル」に用ゐられる根拠に乏しいと考へられるものである。新撰字鏡天治本の卷二(六丁ウ一行目)に、

辭

許觀反去、性血
塗器祭名

とあるもので、新撰字鏡は他に卷十二の十丁ウ一行目に「辭虛鏡反」として、雑字第五百五十七にも類似形を示してゐるが、ここでは明らかに「面」部第十六に属せしめてゐる。とにかくそれらに伴ふ注から判じるならば「峠」と同字であらうと思はれる。すなはち類聚名義抄(観智院本による)の僧中の九十二皿の部の後半に付けられた血の部に、

峠

或懸字許歎(親ノ誤カ)
又血祭也

とあるのととは同字であらう。

したがつて「贅」なども同じ字の關係にある文字であつて、字音は「キン」、その訓は「ウカ、フ・ツミ・ヒマ・

ウゴク・ス・ム・チヌル」などである。したがつて「ハタカル」とは何らの関係も親縁もない文字であつたと思はれる。

「熱田本平家物語」の「辭」の使用は、どのやうな動機に出づるものであつたにせよ、その工夫は、類を絶する。ここにひるがへつて、真名本のやうな表記体を目指す場合、一般的にどのやうな工夫が考へられたであらうか、といふ点に考察の焦点を求めて見よう。また、その前に、日本語を漢字で表記するといふ行動がどんな理にしたがふかを別の具体的な例において考へて見よう。

三

「今昔物語集」において、大字のかたかなで記してある箇所は、漢字片仮名交りで書くきまりのある「今昔物語集」の表記法、即ちいはゆる宣命書きの一般から推すに、漢字表記の方途を知らなかつた語であらうと思はれることが多い。また、表現する人、書記する人の臨時の留保（いはゆるどわすれといふものも含めて）に属する場合もあつたらうと思はれる。漢字の使用は、訓読を行ふものでは、

字訓に相当するところの、表現したい語をコードにして字が検索されるといふシステムを前提として成立つわけで、あらかじめ、漢字の訓の固定がなければならない。少くとも一般の人々に読解してもらふためには、漢字のわかりやすいものを使ふといふ意味で、字音・字訓のよく普及してゐるものであることを必要とする。そして、

- (1) 表現すべき文脈中の語の選択
- (2) 選択された語にひとしい字訓をもつ字の選択

(3) 選択された字に対する、文脈中の語の表記上の微調整——おくりがな、すてがな、または他の字との位置

関係の調整

といふやうな操作を経て、漢字は書記される。訓によつて漢字を用ゐるといふ場合、訓は、いほその字義を代表する日本語による字名でもある。中国語式による字名はいはゆる字音のうちの普通のものである。漢字には、したがつて、一単字について、いろいろの呼称があることになる。

「菊」は現代語ではキクと呼ぶより外にないから一名称に限るわけであるが、「人」は「ニン・ジン・ひと」の三名称をもつ。またそれらの総合体として示される。

しかし、訓は、右のやうに名称といふレベルに固定して

あるもの以外にも存在する。「一」の場合、名称としては、「イチ・イツ・ひとつ」、人名用としては「はじめ」などが用いられる。けれども、その字義をあらはす訓としては、古辞書の場合、

ヒトリ、モハラ、トモシ、トモ、キハム、チヒサシ、
ヒトタハ、オナシ

などもかなり観念的にはあるが、同時に存在したとみとめられる。文脈の中にある状態でみると、「一」の字は、いろいろの訓をもつのである。しかし、文脈を新しく造つて、書き記してゆく行動に出るとき、モハラに「一」が躊躇なく選ばれるかといふにさうではないであらう。オナシを書くときに「一」よりは「同」をえらぶのが伝統的な習慣である。

一般に、漢字をもつて、日本語を書いてゆく行動の前提には、右のやうな仕組があるとみとめることが正しい。先にふれたど、わすれの場合には、字書を引くであらう、そこには、字音も字訓も示してあるから、それによつて、使用上の不都合の大部分は取り除かれる。

とにかく、もし、そんなことがありえたとしての話であるが、漢字は、形を知つてゐるだけでは到底使ふことがで

きない。形のほかに字音・字訓の両方、もしくははいづれか一方を知つてゐるのでなければ具体的な言語表記の目的もとづく使用に至らない。

「熱田本平家物語」を書いた人も、当然そのやうな仕組に立つて字をえらび、字を書いて、あの晦渋な文章を遺したものであらう。

さて、「今昔物語集」の表記について、小さな問題があることから具体的に本題に入り本論を展開したい。

「今昔物語集」には、ところどころ、量としてはさして多くはないが、撰述された当初からの欠文があつたと考へられてゐる。各語の冒頭に多い、「 天皇ノ御代」とか「 ト云フ者有ケリ」といふ類の、語が具体的に決定を見なかつた場合のもの、文章のやゝ進んだ途中であらはれるもので、特に本文伝承の過程で欠損したとは考へられず、語の選択がきまつてゐたであらうのに表記を保留したものと二つがあるやうに思はれる。馬淵和夫の説にもその趣旨がふくまれるものとすべきであらうが、たとへば次の如きがその一つである。

卷第二十八の左京大夫 付異名語第廿一の本文の中

で、

(1) 長少シ細高ニテ極ク □ ヤカナル様ハンタレドモ有様姿ナム鳴呼也ケル (古典大系本五ノ八七頁)

(2) 天皇此レヲ聞食シ餘テ「……父ノ御子此レヲ聞カバ此ク制止スルヲハ不知スシテ我ヲヨソ我恨ムトスレ」ト仰セ給ヒテ □ ヤカニ六借ヲセ給ヒケレハ (同八八ノ五)

(3) 堀川ノ中将戯テ「不為シ」ト辭ヒ給ケレドモ集テ □ ヤカニ責ケレハ (同八八ノ一二)

(4) 否腹立セ不給テ天皇モ極ク咲ハセ給ケル其ノ後ハ □ ヤカニ六借ヲセ給フ事モ无カリケレハ殿上人共弥ヨナム咲ヒ嗶ケル (同八九ノ九ノ一〇)

この四つの場合を考へてみるに、□ ヤカナルまたは □ ヤカニのところ、一つの話で四個所も欠文といふのは自然の欠損ではなく、故意か作為か、何らかの意識的な行動によるものと考へるのが常識であらう。そして「ヤカナル」「ヤカニ」といふ送仮名が決定してゐるので、すでに語の選択が終つてゐる段階と見ることが出来る。そして、これらの中、後の三つには同一の語が位置すべきものと、文脈上推定できるところである。

この話は、「宇治拾遺物語」にも同じやうな文章で見え

てゐるから、対比すると、□ ヤカの四つの個所は、

(1) アテヤカナル

(2) マメヤカニ

(3) マメヤカニ

(4) マメヤカニ

が推定される。この話では他に、

欄ノナヨ、カニ微妙キ裾ヨリ青キ出シ褂ヲシタリ (同八八ノ十七)

(同八八ノ十七)

といふかたかな大字もあり、なほ「ヤガテ」(同八八ノ一二)「ヒタ青ナル」(同八九ノ八)のやうな、同じくかたかな大字の表記もあつて、いはゆる漢字かな交りの宣命書きの異例に属する別の型を示す例を見るから、同時に考慮をめぐらすべきものかと考へられる。

「ナヨ、カニ」の場合、同じ巻二十八の十二の「或殿上人家忍名僧通語」の中の、

女房様ニ懸タル □ ヨカナル狩衣ヲ取テ烏帽子ニ具シテ袋ニ入レテ遣テケリ (大系本四ノ七六ノ七)

同様ニ □ ヨカナル僧ノ衣ヲ取り違ヘテ入レテケル也ケリ

(同 七六ノ一五)

の空格にもあてはまるものかと思はれ、欠文が、当初から

存する場合の一つのパターンとして、かたかな大字にするか、それとも漢字を留保して後の補填を期するか、いづれかにゆだねた語があつたものと理會してよささうに思はれる。

勿論、方法的に嚴密を期するならば「宇治拾遺物語」などを参照して、補填してみるといふ安易な方法によることなくして、むしろ「今昔物語集」中に内在する証を見出して補填してみるのが、読解の常道であらう。

さて、そのやうにしてみると、別稿（角川書店刊『鑑賞日本古典文学』第十三卷所掲拙稿）の中で述べた、「目口□_テ」が「目口開_テ」にほど相当するもので、「ハタカリ_テ」が該当するであらうことは、表記する人の心理への立入つた解釈ではあるが、ほど穩当なものではあるまいか。

ここで、本題に進む。「ハタカル」もしくは「ハタクル」といふ語は、普通に字書・辞典によつてみると、今触れたやうに、早くから漢字表記の安定した語であつたとはいへまいと思はれる。また、先に述べたやうに清濁の点では「ハタカル」の形が古い語形として存したと考へられるものである。

一方、「フミハタカル」といふ複合語の形が、「跋扈（颯）」

といふ語の文選読みの中に見出される。文選読みは、はじめは、読書の際のよみ方として存したものであらうから、それは表記の世界に直ちに反転して用ゐらる段階に達するには多少の時間を要したであらう。しかし、この「跋扈、フミハタカル」は、手近なところでは「将門記」の真福寺本に見られるもので、漢文風な表現には、「跋扈」を「フミハタカル」に用ゐることが全くなかつたわけがなく、漢文に親しんで、修辭を心がける人においては、漢文訓読の反転応用も、漢字表記の工夫として、さして困難を伴はずに可能であつたものと推定することが出来る。「目口ハタカル」の「ハタカル」と、跋扈の「フミハタカル」（日ボ辞書風にいへば連濁になつて「フムバタカル」）の「ハタカル」が、同一の語であるかどうか、さらに考ふべき点があるかとも思はれるが、ラボ日辞書に「フミハタクル」の形、日ボ辞書に「フムバタカル」の形が存することから、一往、「ハタカル」と同一と見ることにする。「ハタカル」の語を表記するには、「跋」「跨」「騎」などの字を用ゐることが出来る素地があつたと思はれる。その事は、類聚名義抄にこれらの三種の字に「ハタカル」の訓が付けられてゐたことから想像できるが、名義抄は、なほ、漢文訓読の成果の

集成といふ色の濃いものであらうと見るなら、表現・書記の行動の世界において普通であつたかどうかについては、尚他に傍証を得て明かにすべきものが遺るであらう。

名義抄の示す漢字と語との対応関係（といふよりは漢字理会の範囲）に対して、色葉字類抄三巻本の示すところは、むしろ漢字による語表記の基準（しかも、書記言語作品を制作するときの実際的な指針）であつたと解してよいならば、そこに「ハタカル」がどんな漢字と連合してゐるかを問うてみるのも一方法であると思はれる。

字類抄には、

扈ハタカル

（上巻、ハ 辞字。前田家本による）

跋武芸部扈ハツコ踏張分

（上巻、ハ 疊字。 同 右 ）

跋扈フムハタカル

（中巻、フ 疊字。黒川本による）

などがある。たゞし右にあげた名義抄・字類抄の例は、いづれも声点を差していないものばかりであつて、清濁いづれも不明に属するが、積極的に第二音節が濁音であることを主張することはないわけで、前述の行論とは矛盾を生ずることはない。

今昔物語集の「目口ハタカル」は、「目口」を上位にもつ、一つの慣用の句の体をなしてゐるが、このいひ方は、

勿論、「あきれて、開いた口がふさがらない」といふ事態をさすばかりではなく、前述の拙稿にも引用したが、（そして運歩色葉集の例が正にそれであるが）有林福田方の本文に見られる如く、病人の症状の描写にも用ゐられたいひ方である。

千金方云 失欠フクヒスルトキ 頰車キハチカマ 蹉開張クチアキハタカル

（巻四、古典全集本中巻四一四頁八行目）

がその本文である。ただし、他にも、「ハタカル」の別語形で、いはゆる他動詞形と考へられるもの、さらにいへばキリシタン資料の「ハタクル」の古形「ハタク」もあつて、それは、

失衣ニメ身ヲ冷ス時ハ 瞋ハタケ 脹イカリ 脹イカリ 肩息心下淡々トメ寒タルヲ食スレハ即泄也ハタケ（巻四、同三六〇頁一行目）

簡易方云肺ハ五臟六腑ノ花蓋タリ……（中略）……喘ノ病ヲ為ス由ハ痰実メ而氣不レ散セ上テ咽喉ニ激メ哮ノ呻ト声ヲ作シ略トモ不出。嘔トモ不レ下ラ。憧々トメ而急ニ喝々トメ而数シキリニ口ヲ張肩ヲ擡身ヲ揺肛ヲ輒……

（巻七、同、五八五頁一行〜三行目）

の二例であるが、「ハタク」が、「ハタカル」と同一の語根 Fata- を共有することは明白である。ひるがへつて、「目口開テ」の「開」についてみると、医書において、「開」の漢字をいつの場合でも「ハタカル」もしくは「ハタク（或はハタクル）」と対応させる鉄則があつたわけではない。医心方によると、

広利方理日久風赤生息肉痛開不得方

のやうに「アク」とよむことがあり、有林福田方にも

口ヲ開

(中巻、三六〇頁三行目)

のやうな例がある。また「目口……」といふ場合は

口眼

喎邪

(三七八・四、四〇一・九、四〇六・五)

口眼

喎僻

(三九八・二)

の如き連接を示すこともあるから、「目口ハタカル」を、唯一の、排他的に成立する連接形式であると迄主張することは正しくないけれども、病的現象、症状の描写でないことを考へると、「今昔物語集」については、以上述べて来た諸件から、「目口ハタカル」の解をもって最勝のものとして考へるのである。

四

右の行論において、筆者の主張したいところは、実は「ハダカル」といふ語についてではなく、「ハタカル」について「僻」の字が用ゐられたといふ事実の確定であつた。この事実の確定が認められるならば、結論は、もはや、簡明にいへば敷衍を費すのみで足りる。

即ち、熱田本平家物語の「僻」の字は、「ハタカル」に仮装せられた「半面」といふ熟字の monogram であるといふことである。

博雅の士には周知のことであるが、遊仙窟の古訓点本や古辞書によると「半面」は、「ハタカクル(或は連濁形ハタガクル)」もしくは「サシノゾク」の訓によつて読まれた熟字、すなはち疊字(三卷本色葉字類抄によるなら)である。しかし「ハタカル」を、この「半面」を一字にまとめた「僻」によつて表記する工夫は、いくつかの不合理を敢てしてゐる点で、読者には首肯しがたいであらう。

すなはち、語は「ハタカル」であるのに、字は「ハタカクル」(或は連濁形「ハタガクル」)であつて、「ク」の音

節が無視されてゐるではないか。

次に、熟語を一字にまとめるといふ手法、モンゴラム合字の工夫が認められるものか。

筆者は、右の疑団を氷解させて始めて、この論文は意味をもつものと考へるので、ここにその段に進み終結としての。「半面」が「ハタカクル」と訓ぜられた事実については、多くの言を費す必要がないけれども、冗説するのは、初歩の人々の為を思ふのみで、しばらく宥恕を乞ふ。

類聚名義抄では、「半面」の文字列は、二箇所に見え、一つは法上の一〇二頁（風間書房刊本による）に見える。それにはハタガクル（第三音節濁音ガ）およびサシノゾクの二訓が付いてゐる。他は、仏上の七八頁で、ハタカクルとあるのみである。このハタカクル（もしくはハクガクル）の訓こそ、「ハタカル」の語の表記に結びつけられる動機となつたものであらうと思はれる。色葉字類抄にも「半面ハタカクル」は見えてゐて、院政期ごろの漢語の中では、ハタカクル（もしくはハタガクル）のいはゆる熟字訓で通用してゐたものと解せられるが、ハタカクル（もしくはハタガクル）といふ語が、次第に耳遠い語になり古典語化してゆく間に、「半面」はもともと遊仙窟の中に見える用語

でもあつて、一種の難字として、書記言語活動——つまり表現、伝達を目あてにする書記活動の中では、珍重すべきものになつて行つたと思はれる。ハタカクル（もしくはハタガクル）をごく普通に日本風に漢字で書き表はすと、「今昔物語集」巻第二十二の第七の話のやうに

几帳ノ喬ニ斂隠^レ居タリ奇テ見レハ見^シ時^モヨリ
長ビ増リテ非^テ者ニ微妙ク見^ユ

と書かれることがあつた。勿論これは一つの例である。他にも方法はあつたらう。そしてこの方法によると、「ハタガクル」といふ連濁の形をも包摂してあらはしえたものと解せられる。「栄花物語」巻第十一の三条天皇の長和三年正月の記事に、中宮の御方へ天皇が渡御する場面があつて、
宮の御前は御木丁に半隠^{ハタカク}れておはします

の如くに漢字を宛てることも行はれる。尤もこの「半隠」は近代の研究者のあて方であるやうだが、これも一案かも知れぬ。

一体に「ハタカクル」（もしくはハタガクル）のつかはれる文脈は、「かげろふの日記」中に、

こたみは、つゝむことなくさしあゆみて、たゞいりに
いれば、わびてき丁ばかりをひきよせてはたかくるれ

どなにのかひなし

とあるやうに、「凡帳にはたかくる」といふのが殆どのやうで、「栄花」のも「今昔」のもさうであつたし、「源氏物語」に見えるのもさうである。これらの表記もまた連濁形「ハタカクル」を排斥しないものと考へうる。名義抄など漢字々書の漢字と倭訓との連合の原泉とみられるものとしては、

余讀レ詩詠拳ケ頭へ門中ニ忽見十娘^{ミツ}半面^{チヤウカ}

(遊仙窟醍醐寺本古典保存会複製三丁ウ二一三)

ここでは「半面トハタカクレタルヲ見ツ」といふ文選読になつてゐる。この自動詞形「ハタカクル」に対して同じ遊仙窟には次のやうに他動詞形「ハタカクス」の訓が「隠」について見えてゐる。

自^{アズレハ}隠^{ハタカクシテ}ニ多^ニ姿^ニフ^一(別訓隠^{ハタカクシテ}ニ多^ニ姿^ニフ^一)

この「隠」は別の個所では

自^{ワレハ}隠^{ハタカクシテ}風流^{ミヤヒヤカナルヲ}

の「隠」といふ訓があるから、意味は、「自負するところあつてもおもてには(全部は)あらはさない」といふのであらうか。遊仙窟の「半面」は、原文に即していへば、文

字どほりに名詞ならば profile であり、動詞としては「横顔をあらはす」といふポジティブないひ方で、むしろ「サシノゾク」が適切であるかに思はれるのであるが、訓の方では「ハタカクル」であるから、どちらかといへば態度としてはネガティブないひ方で、むしろ逆になる。

それは、今の場合さして重要な問題ではないからさしおく。「半面」が「ハタカクル」とよまれることの根源は「半面」が遊仙窟に見えるところにあり、それによつて、その文選読を字書にも採録して伝へたといふかなり特異な伝承の筋道があつて、そこからはじめて書記言語の世界の常識になつたものと思はれるのである。

「闇」で「中門(チウモン)」を表記するのはよいとしても(拙稿「熱田本平家物語の漢字とその用法の一側面」)成城文藝第一〇号にすでに扱つてある)「チウゲン(中間)」「(卷二、三八才三)に用ゐるのは、その語形(チウゲン)と、よみ(実は字音のチウモン)との照応関係は、途中までのチウでは一致するが、モンとゲンとは、文字の形が門がまへをもつといふ類似があるのみで、必ずしも過不及なしといふものでない。

「チウモン」の形に「チウゲン」を類似点ありとしてオ

ーヴァラップさせて、その輪廓の曖昧になるのを却つて応用して表記してゐるものと考へられる。

「ハタカクル」と「ハタカル」とは語形の長短に差があるにかかはらず、書記的言語としては恐らく連濁形ではなく「ハタカクル」として伝はつて来たであらうから、「ハタカ……」の三音節の共通によつて、オーヴァラップを恣意に行なひ、その上に「ハタカクル」にのみ用ゐるべき「半面」を一字の左右にふり分けてモノグラム化したものと考へることができよう。元來、上下に連結する文字列が、左右の位置關係に振かへられる例は、「目出（めでたし）」を「咄」とする如きで、「熱田本平家物語」としては、絶倫の型ではない。

「耳語」の文字列を前提にすると「聆（ササヤク）」が、不自然ではなく、また当座の即興にしても根柢の深いことが知られよう。

さて、右のやうに見ることがもし正しいとするならば、「熱田本平家物語」において、語を表記する工夫の一つとして、目出↓咄に類した合字の手法があつたことは、さして新奇な事実ではないが、漢語的な由来をもつ「半面」か

ら「𪛗」を生じたことは、二字文字列から一合字への轉換として従来気づかれなかつたことのやうに思はれる。

しかも、語形の近似を契機としてゐるといふ点は殊に注目すべきことではないかと思ふ。「ハタカクル」が「ハダカル」といふ第二音節濁音の形であつたならば、「ハタカクル」（もしくは連濁形「ハタガクル」）との語形上の類似は、かなり薄れるから、おそらくは類似を利用してのこの合字製作までは達しなかつたかも知れない。